

イスタンブルの怪しい本屋

イスタンブル留学中に見つけた怪しげな本屋。外見に似合わず古書の宝の山だったが、店よりもっと怪しげな店主がそこにいた。彼が最もウマの合う本屋の友人になろうとは、当時は思いもよらなかった。

高松洋一 たかまつ よういち / AA 研



偶然の出会い

イスタンブール新市街の路地裏に、その店はあった。ショーウィンドウには本らしきものが見えるが、いったい何の店なのか、そもそも営業中なのかも定かではない。意を決し、段を上って扉を開けると、そこは果たして古本屋だった。しかも薄暗い店内に、よそではなかなかお目にかかれない1928年の文字改革以前のアラビア文字で書かれた古本が、棚から床まであふれていたのである。我を忘れて何冊か選び、恐る恐る仏頂面の店主に価格を尋ねると、引き出しからやおらポケットコンピュータを取り出して、扉頁に鉛筆で書かれた数字を入力し始めたのにはびっくりした。30年近くも前、日本でもデータベース化された古書店な

どなかった時代のことである。さらに値段を耳にして驚いた。一桁間違っていないか聞き直したほど安いのである。思わぬ穴場の発見に狂喜したが、これが20歳以上も年齢の離れた友人ヒルミーとの出会いだった。

もっとも、掘り出し物を求めて足繁く通うようにはなっても、彼とすぐに親しくなった訳ではなかった。店構え以上にヒルミーは怪しげな人物だったからである。トルコ人には珍しく、向こうからはほとんど喋らない。夏でも足元に置いたガスコンロで暖をとり、貧乏ゆすりしながら虚空を凝視している。営業しているように見えないせいで、よく店の入口をふさぐように車が停めてあったが、そのたびに彼は車の屋根を踏み越えて

出入りするのであった。いかにも挙動不審のアブない人なのである。

ヒルミーの素性

しかしヒルミーは本のことは実によく知っていて、質問するといつもの確かな答えが返ってきた。突然「しばらく店を閉める」と言って何週間か姿を消したと思うと、イギリスから珍しいトルコ関係の古書を仕入れてくることもあった。

彼の売り物はなぜか表紙が取れたり、擦り切れたりして状態があまり良くないので、いつも全頁点検するようにしていたが、私が穴の空いた頁を見つけると、どこからか同じ本を両面コピーしてきて、穴をぴたり修復してくれたこともあった。またある時、私が落丁を告げたら、店の地下から同じ本を取り出して、欠けていた頁を切り取って補ってくれたこともあった。「そっちはもう売り物にならないじゃないか」と尋ねると、そもそも地下にストックしてあるのは、修復用の落丁本や断簡ばかりだと言う。

店の品揃えと言い、どんな本でも無駄にはしない熱意と言い、やはりヒルミーはただ者ではないようである。だが彼のことを他の本屋に聞いても、どうも評判がかんばしくない。「偽善者先生（ミュナーフク・ホジャ）」という仇名で呼ぶ者もいた。「偽善者先生」とは、敬虔そうに見えてイスラームの戒律を守っていない学者という意味である。彼は学位をもっていると言う噂も一度聞いたが、普段の挙動からは私にはとても信じられなかった。

ところがある日のこと、私の他には客が減多に來ない店内に一人の紳士が座って彼と談笑していた。ヒルミーの楽しそうな様子に驚いていると、お客は某国立大の学長だと自己紹介し、傍のヒルミーを指して笑いながら「こいつは俺たちから逃げたんだ」と言った。聞けば、ヒルミーはハディース研究で博士号をとり、助手時代にロンドン大に留学もしたのだが、大学に嫌気がさして本屋に



アジア側移転後の「新しい」店。何とも言えない風情の外観だが、初めての客は入るのに勇気があるだろう。Yusuf Çağlar氏撮影 (Yusuf Çağlar, Belgezar 2013, İstanbul, 2014, p.50より)。

本に囲まれて座るヒルミー。傍らには紙コップ、写真では見えないが足元にガスコンロがある。



ヌーリー『詳細詳解 公用文作成』イスタンブール、1909年刊。手紙の書き方を集めていた時に買った本。からうじて表紙が残る。5桁の24202がヒルミーによる整理コード。

*写真は特記以外すべて筆者撮影。



所狭しと本が並んだ店内の様子。
この混沌ぶりが何とも心地よかった。



ヒルミーの別宅?で山積みされた本を物色する筆者(撮影:ヒルミー)。自宅に本が入りきらなくなり、向かいの空き部屋を倉庫に借りていた。

ペンネームで書かれたヒルミーの詩集。「尊敬すべき貴重なわが顧客にして未来の教授タカマツへ 深い愛情とともに」という献辞が書いてある。トルコ人は一般に人を姓では呼ばないが、筆者はいつもタカマツと呼ばれていた。

なってしまったのだと言う。噂は本当だったのである。

その後、彼がロンドンで交通事故に遭って開頭手術を受け、九死に一生は得たものの、すっかり人柄が変わってしまったことも知った。同業者から「偽善者先生」などと呼ばれているのも、彼の学識と学歴に対するやっかみだとわかってきた。進学率の低かったトルコでは、古本屋にも当時大卒は数えるほどしかいなかったのである。

本に囲まれて

彼の素性を知ってから、ふと思ひ立ちアラビア語の語形変化について質問してみた。すると普段の寡黙とは違って変わり、いつまでも解説が止まらない。饒舌ぶりに啞然としていて「なんて奥が深いんだ、そうだろう」と目が生き生きと輝いている。「他の奴らのように活用を丸暗記しているんじゃない、俺は頭の中で計算しているんだ」と誇らしげである。

これをきっかけに、彼は私によく話しかけるようになった。足元のコン口でお茶を沸かして紙コップに入れて渡しながらか「お前は今回感謝するか」と尋ねる。私がキョトンとしていると、紙コップに角砂糖を入れて「これがテシェッキュルだ」と言いながら片目をつぶっている。砂糖を意味するシェケルという語をアラビア語式に語形変化させた、会心のダジャレなのである。どうやら私は彼のアラビア語ギャグが理解できる程度に、話のわかる奴と認定されたらしかった。打ち解けてくるうち、彼一流のユーモアがあるのもわかってきた。売り物の古文書に、あるはずのない皇帝の花押が描かれているのを私が見つけ、「これは偽物だ!」と言うと、「いや、俺のオリジナルだ」と彼は澄まして答えたものである。

そのうち「本を見に家に来い」と、彼の自宅に誘われるようになった。どんな陋屋ろうおくかと思っていると、モスクに囲まれた旧市街の立派なアパートに

案内され、螺旋階段を登りきった最上階の一室には稀覯本が書棚に整然と並び、店とのあまりの落差に驚かされた。奥さんの手料理をご馳走になり、おしゃべりする一方、蔵書に私の気に入った本があれば、売ってもくれた。こうして彼の家に何度足を運んだことだろうか。

夕間の甲板

留学を終えた後も、私は毎年イスタンブルに調査に行くたびに、彼の店を訪れるのが楽しみだった。彼が大家に立ち退きを通告されたと聞いた時には、思い出の場所がなくなることに心底がっかりしたが、翌年イスタンブルを訪れた際には、どうやって見つけたのか、対岸のアジア側に前とそっくりな雰囲気のお店を構えていた。

それ以来、私が調査でイスタンブルにいる間中、週に2、3度は海峡を渡って彼を訪れ、夕方一緒に店を閉め、ヨーロッパ側まで汽船に乗って帰るのが恒例になった。彼はいつも船着場のそばの大通りに来て車ごとぎれると見るや、私が止めるのに耳も貸さずに「走れ!」と叫んでサンダルで駆け出すのである。汽船に乗ると、甲板で彼はお茶と一緒に飲みながら「ある日ナスレッティン・ホジャが言ったことには…」と古いとんち咄を上機嫌で語り始め、話しているうちに自分でおかしくて笑い出してしまう。ナスレッティン・ホジャは、日本で言えば、一休さんや吉四六のような昔話の主人公だが、夜空の下でヒルミー自身がナスレッティン・ホジャに見えてくるのであった。

忘れ形見

先日、引越して行方不明になっていた彼の生涯唯一の著作をやっと見つけることができた。文庫本ほどの大きさの『四十人の聖者の国』という、彼から贈られた詩集である。裏表紙には、彼自身をうたった詩が印刷されている。そこに記されているのは、幼い頃から丁稚奉公で全く学校に行けず、



イスタンブル新市街の街並み。19世紀に開発された「新」市街なので、建物の多くは100年以上も前のもの。

兵役を終えた年齢になって通信教育で初等・中等教育を終えるとイスラーム学の高等教育を受け、博士号をとってロンドンに遊学した彼の半生である。教育制度が整っていなかった時代ならではの異色の学歴で、もはやトルコでも彼のような経歴、学識の人物が現れることはないだろう。

本当に私は、彼からは多くのことを教わった。本の内容を尋ねて知らないことはなかったし、その時々私の研究テーマにあった貴重な本を何度見つけてくれたことだろうか。

だがそのヒルミーは、残念ながらもこの世にいない。螺旋階段から落ちたことが元で寝たきりになり、亡くなってから8年になる。イスタンブルに行けば、今でも彼に会えるような気がするが、この詩集を読み返すことだけが、彼と対座できるもはや唯一の手段なのである。

FP